



神輿庫

神輿庫と神輿
 神輿を安置する建物を神輿庫という。神輿は民間では（ミコシ）といわれ、起源は不明とされるが、奈良時代から用いられ、平安中期に盛んになった御霊信仰とともに地方へ普及した。神輿が用いられる前は、神霊を勧請するために、神に鏡を取り付け、これを馬などに乗せるのが普通であった。神輿は種々の形があるが、基本的には台と胴と屋根の三部構成で、台に二本の棒を縦に貫き、これに横棒を取り付けることもある。木製で四角、六角、八角などがあるが、四角が一般的である。神輿には葺手（屋根の四隅から出ている渦巻き形の付いた飾り木）が屋根の下から出ている京神輿と葺手が屋根の上から出て鳳凰の尾が下に流れている江戸神輿とがあり、当社の神輿は京神輿のようである。神輿を担ぐ者は若者とする所が多く、よく



神輿庫に安置された二基の神輿（右：鶴崎神社、左：八幡神社）

荒れるが、これを人々は神意の具現と認め、神輿振りともいった。当社の神輿庫は都窪郡誌によると、明和四年（1767）に建築とあるが、「早島沿革」には神幸祭が始まった寛保元年（1741）に「神輿庫梁行二間、桁行二間創立」とあるので、明和四年の時は修理を建築の誤記か、或いは火災などにより建て替えられたのかも知れない。



修復に出される神輿（昭和57年6月24日）

当初の神輿庫は大正期の写真を見ると、鹿島神社参道の石段左側の玉垣部分に建設されていた事が窺える。鹿島神社の玉垣は、大正十五年四月に建立されているので、その時に現在の場所に移して改築したものと思われる。その後、屋根が老朽化して雨漏りが発生したため、平成十四年十二月に本葺き瓦から平葺き瓦に改め改修した。

納所浩氏の記した逸話によると、当社の随神門を建設するにあたって、吉備津彦神社の随神門を模倣しようとして検分したと記してある。比べて見ると、屋根が瓦葺きと銅板葺きの違いこそあるが、細部に渡って良く似た造りとなっている。



吉備津彦神社の随神門

このえふ 近衛府

律令制下における令外官の一つで、宮中の警固や天皇が行幸時の供奉にあたった。

親衛の職として中衛、外衛、授刀衛などが置かれたが、天平神護元年（765）に授刀衛が近衛府と改称された。

とねり 舎人

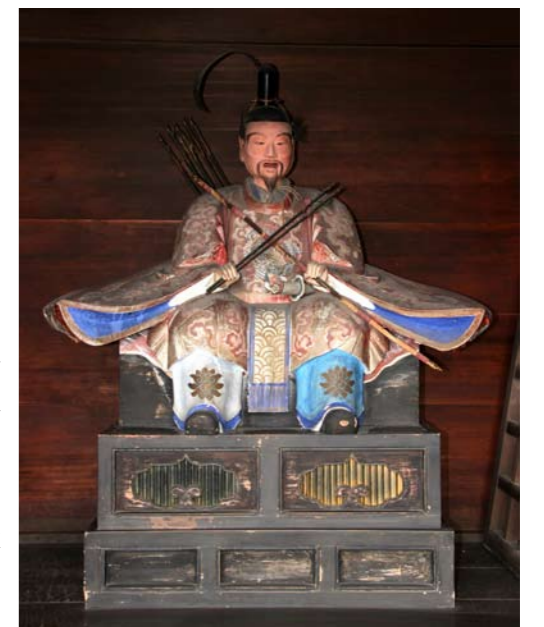
天皇、皇族などに近侍し、警固や雑事を取り扱った。衛府の兵士などの総称。



随神門



正面から向かって左側に祀られている左大神



正面から向かって右側に祀られている矢大神